



TITLE:

わが街 わが大学 わが生協 「古都の
薫り豊かな大学生協」

AUTHOR(S):

山口, 巖

CITATION:

山口, 巖. わが街 わが大学 わが生協 「古都の薫り豊かな大学生協」. ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 1998: 786-782

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65769>

RIGHT:

的大であると思われるが、形態論が完備しているために、ある程度学習が進めば、他の言語と特に異なるほどのむづかしさを感じることはないと思われる。

また既に述べたように、ロシア語と他のスラヴ諸語との関係が比較的近縁であることから容易に察せられるように、これらの言語を学ぶ必要が生じた時には、ロシア語の知識の有無は、極めて大きな意味を持つことになる。従ってロシア語の学習は大きくいってスラヴ世界への鍵を提供するものであるとすら言うことができよう。

何れにせよ長期的に見れば、海をへだてて接するロシアの国とその民族の重要性が、我国にとって益々大きくなっていくであろうことは、想像に難くない。この国に対してどういう立場をとるかは別にして、ロシア語の重要性もまた決して減少することはないと考えられる。できうるならば早い時期に学習されることを、勧めたいと思う。

(山口巖氏は教養部助教授)

UNIV. COOP No.155 (全国大学生生活協同組合連合会機関紙) 昭和60年6月15日。

わが街 わが大学 わが生協

「古都の薫り豊かな大学生協」

都の「東北」にあった我が京都大学の界限も、北白川から北大路と街がひらけるにつれ、何時しか中心に近くなってきた。それでも、仰ぎ見る如意ヶ嶽の景観ばかりか、吉田山の麓にひっそりと佇む屋並みも、昔とちっとも変わっていないように見える。学生の頃、ポケット瓶を忍ばせて散歩した真如堂の辺りを通りながら、あの窓には誰それが下宿していたものだと言ひ合う楽しみも、未だ残されている。道端に崩れた土塀や木のうろなどのそのままのものをみつけたりすると、何かしら訳もなく感動し、その風景の中の、自分ばかりが変わり果てて終

わっていることが、とても不当な、不思議なことのようになられてくる。

今、キャンパスの中で、荒々しくも生き生きと生活している学生諸君の、やがては過ぎる青春の記憶のためにも、この街がいつまでも変わらぬ姿を保っていて欲しいと願うのは、私一人ではあるまい。

キャンパスといえば高度成長政策の下で構内には学生が増え、新しい建物が建ち、そして道の両側は車の大群に占拠されるようになって、環境は悪化するばかりである。加えて最近の経済事情の悪化もある。「人心」が荒んでくるのも当然であろう。「文化」は却ってキャンパスの外へ逃避して終わったかに見える。

この中でこそ、生協が果たすべき役割は、ますます重大なハズである。生協が提供するものは単なる「もの」ではなく、ものを通じた「文化」であり、「こころ」でなければならないし、また生協こそそれができるハズの組織である。

孤立しがちな一人ひとりの心を通わせる企画は、従来から行われてきた。合ハイやコンパの世話や、秋の大生協まつり、キャンパスごとの生協まつり、ハイキングやボーリングなどの催しなどはみんなそうであった。しかし、これらが未だ「ものを通じた」ものとは必ずしも言えなかったことも、事実であった。数年来行われてきた「声」の運動、一回生五十クラス中四十二クラスに及ぶ組合員討議、店舗委員会の組織など、着実に前進しつつある組合員の参加も、この方向への一歩として位置づけられるべきであろう。

今年もまた、希望と不安で胸を一杯にした新入生がやってくる。生協あげてとりくむ新入生歓迎の行事もまた、何よりも「こころ」と業務の結合として考えられねばなるまい。

副理事長 山口 巖